

---

# Summertime Blues

智晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S u m m e r t i m e   B l u e s

### 【Nコード】

N 0 2 4 3 A

### 【作者名】

智晶

### 【あらすじ】

突発的に仕事を辞めた「私」の転職先は、うらぶれた雑居ビルの一室にある、いわゆるつきの法律事務所だった。人形のように美しく無表情な19歳の才女と、新米無能弁護士で彼女に唯々諾々と従う所長との奇妙なコンビの下、「私」は事務員として働き始める。やがて「私」の身近で起こった凄惨な事件の全貌を鮮やかに解明していったのは、稀有な頭脳を持つその不思議な女性だった。

## 序章

### 序章

私、安曇朱音が彼女と出会ったのは、薄いレモン色の日差しが目映い初夏の午後だった。

中堅国立大学の法学部を卒業し、格段の理由もなく証券会社に就職して一年が過ぎた頃、私は早くも辞表を提出していた。

眠れずに迎えた午前五時、淡いグリーンの便箋に形式ばった文面を筆ペンで書きつけながら、つくづく自分は適応力のない人間だと自嘲していたのを思い出す。

煩雑な人間関係、意味のない儀礼。そういったものの存在しない職場へと脱出したい。

そんな理由だけで、無味乾燥だが安定した生活をあっさりと捨て去れる自分が、密かに誇らしくもあり、しかしそれ以上に哀れだった。

再就職のあては全くなかったが、すぐに生活に困るということもなかった。

私の両親は、私が中学生の時に飛行機事故で他界していた。それ以来私の家族は、五歳離れた姉の絆奈だけになった。

かなりの額に上った遺産、航空会社からの賠償金、そして劇団で女優をしている姉の収入で、私たちはそれなりに裕福に暮らしていた。

だから、辞表を提出したその日の昼下がりに一枚の求人ポスターが目に入ったのは、多分に偶然によるところが多かった。

それは雑居ビルの正面に乱雑に貼られていたが、落書きや風雨に汚れることもなく、グレイの壁を背景に端然とした白さを保ってい

た。

斑鳩法律事務所、事務員一名募集。年齢・性別・学歴不問。但し有能であること。

勤務時間・給与等詳細は面談にて。

所長：斑鳩藍司（弁護士） 連絡先：〇三 -

××××

それに目を走らせてから上を見ると、ビルの五階にその事務所の看板はあった。

都心の一等地を外れた場所の、しかも正直に言えばこんな「オンボロビル」に、弁護士が事務所を構えているのもおかしい話に思えた。

だが、私はふつとそのポスターに、正確を期すなら「但し有能であること」の文句に、理由のない好奇心を覚えていた。

このストレートな物言いが、妙に気に入ってしまったのだ。

もう誰かが内定しているかも知れないし、あるいは面接で落とされるかも知れない。

それでも行ってみるだけ行ってみようと、私はバッグから携帯を取り出してその番号を押した。

数分後、私はその事務所のソファに座っていた。

電話に出た気弱そうな男の声は、私の目の前の椅子に納まった、所長の斑鳩藍司のものだった。

若い。

それが彼に対する第一印象だった。

きちんと締めたネクタイを落ち着きなくいじりながら自己紹介をした彼の言葉によれば、大学時代に現役で司法試験に合格し、現在二十四歳だということだった。

柔和な、ともすれば頼りなく見える垂れ気味の目が、突然の訪問

者である私を遠慮がちにみつめていた。

しかし、事務所の奥に据えられた豪奢な黒檀のデスクに座っていたのは、所長の彼ではなかった。

私がある場で簡単な質問　卒業した大学と学部、資格、希望する月給などを彼から受けている間、濃緑色の法律書に頬杖をつき、気怠げにコーヒースタックをすすっていたのは、恐らく二十代に届いていないであろう「少女」だった。

ユニセクシャルな白のワイシャツを着崩し、胸元からシンプルなチョーカーを覗かせた彼女は、私がそれまで会った中で最も美しい、そして最も無表情な女性だった。

切れ長で伶俐な双眸、すっと通った鼻筋、固く引き結ばれた形の  
良い唇。

真っ直ぐなダークブラウンの髪は肩から胸元へ流れ落ち、陶器のような肌と鮮やかなコントラストを描いていた。

彼女の素性を訝しく思っていると、やがてその唇はゆっくりと言葉を紡いだ。

「この事務所の評判を聞いたことは？」

女性にしては低く、少し掠れ気味の涼しい声だった。

「いいえ・・・あの、下に貼ってあったポスターを見て、すぐにお電話したものですから・・・」

「それならば、まずは説明した方がいいな。ここが業界でどんな評価を受けているか」

少女は微笑すると、私の視線を真っ向から受け止めた。

彼女が日本人には珍しい程の赤い瞳をしているのに、私はその時初めて気付いた。

「まず、この本当の所長は彼じゃない。ここは去年まで『瑞代法律事務所』だった。その瑞代瞭祐って弁護士は・・・いや、元弁護士は、今はムシヨにぶち込まれてる。詐欺教唆で実刑をくらってね」いきなりのヘヴィな話の展開に、私は戸惑いを隠せなかった。

「えっと・・・それでこちらの先生が、お仕事を引き継がれたわけ

ですか？」

「正確には、違う。彼の承認を得て、瑞代から実質上の所長を頼まれたのは、あたしだ」

凜とした視線が、私の表情を観察するように動く。

「彼は確かに優秀だけど、実務には性格的に全く不向きでね。あたしは小さい頃から瑞代に預けられて育ったから、本当の現場つてものを知ってる。だからあたしが指揮を執って、瑞代が出所して顧問として戻るまで、ここを潰さないようにしないといけないってこと」  
彼女は椅子から立ち上がり、その赤い瞳を私から微動だにせず傍へと歩いて来た。

華奢な身体から蟲惑的なオードトワレと薄い煙草の香が漂い、私はふと恐怖に似た感覚を覚えた。

彼女は私にクリーム色の名刺を差し出した。

「あたしは美鷺嗣月。最終学歴は匠啓学園高等部、対外的な肩書きは所長秘書」

ひんやりとした指が一瞬触れ、すぐに離れた。

高卒の・・・弁護士事務所所長？

「嗣月さんは私よりずっと有能ですよ。彼女がいればこの事務所は安泰です」

斑鳩がのんびりとした声音で口を挟んだ。

「それに、直観像記憶能力があるんですよ、嗣月さんには。大学時代に私が苦勞して覚えた量なんてあつという間に追い抜かれてしまつてね。彼女の下で働いて、私は満足しています」

斑鳩の言葉には、女神を崇める者の熱意にも似た、憧れと畏敬の念が込められていた。

「そんなものは大した能力じゃない・・・それより、安曇さん？」

「はいっ」

不意に声を掛けられ、思わず素っ頓狂な返答をしてしまった。

「貴女は学歴の点から見れば、この仕事に耐えうる知能を持っていると推測できる」

真珠のような歯が垣間見え、私はそれが彼女の微笑なのだと気付くのに数秒を要した。

「一週間の試験採用の後、問題がなければ本採用だ。給料は貴女の希望に添おう。ただ・・・」

欧米人がよくやるように、両の肩を小さく竦めて彼女は続けた。

「貴女が、十九歳の小娘の指示を受けて働きたくないと言うなら、それは仕方が無いけど。実際、今まで面接に来た人間の大半が、それが不満で自分から帰って行ったから」

「そんなことは・・・ないです」

思わず答えたこの瞬間から、私はあっさり斑鳩法律事務所のスツフとなった。

私の主な仕事は、彼女が口述する書類を文書化することと、事務所の片づけだった。

嗣月は仕事の書類を床に撒き散らす癖があり、それを拾って内容ごとにファイルするのがまず一苦労だった。

「あたしの頭の中には総て記憶されている。紙なんて単なる媒体だろう？一度読んだら不必要だ」

その台詞は全く誇張ではないのだが、それでも事務所に来る客には、床一面に散らばる書類は明らかに悪印象を与えるだろう。

なんと、私に来るまでは、「所長」の斑鳩がこの役目を果たしていたらしかった。

美鷺嗣月の変人ぶりは、一緒に時間を過ごす内に徐々に明らかになってきた。

彼女の居室は事務所の奥の一室にあるのだが、昼過ぎにならないとそこから絶対に出てこない。

正午を幾らか回った頃に、普段にも増して青白い顔でふらふらと「出勤」し、無言で泥のように濃いコーヒーを煎れる。

そして派手派手しいポップスをヘッドフォンで聴きながら、私に向かつて口述筆記させる文書を喋り、同時に自分は全く別の書類にペンを走らせたりしているのだ。

その総てが、マルチタスクのコンピュータを思わせる精確さで淀みなく進行する様は、正しく壮観である。

嗣月は食事を余り摂りたがらない。

コンビニ食が日常らしく、昼にシリアルを流し込み、後はミネラルウォーターやコーヒーのみという日もしばしばだ。

ある日、とうとう見かねた私がミニキッチンで夜食を作ったところ、嗣月は目を見開いた。

「凄いな・・・あたしには無い能力だ。この点に関しては尊敬する」  
思わず私は声を上げて笑ってしまった。

私が作ったのは、ただの肉じゃがだったからだ。

この傑出した才能を生んだ両親はどんな人物なのか、気になって嗣月に訊いてみたことがある。

「父親は画家をやってる。母親は通訳。二人とも滅多に日本にいない。今は・・・父親はヨーロッパのどこか、母親は多分アメリカの東海岸」

「どうして、瑞代先生ところに預けられたんですか？」

突っ込んで質問をするのが憚られるような雰囲気だったが、敢えて尋ねた。

「・・・あの人たちのキャリアにとって負担になるから、それに瑞代自身が引き取りたいと言ったから。養女じゃなく、後継者としてだけだね」

「瑞代先生は、ご結婚なさっていないんですか？」

ふっ、と嗣月は皮肉っぽく笑った。

「あの人は、一つところで大人しくしてられる性格じゃないんだよ。実際もてるし。一度、あたしが高校生の時に、あたしの学校の



理事に口説き落とされて渋々結婚したけど、一ヶ月も保たなかった。ワーカホリックな上に、束縛されると妻でも容赦なく無視するからね」

「それはまた・・・」

そう言うしかなかった。

彼女を取り巻く大人たちの精神の「歪み」は、嗣月にどんな影響を与えたのだろう。

一人娘を他人に預けて帰って来ない生みの親、家庭などはなから気につけない破滅型の育ての親、彼女の下で安穩と傀儡に甘んじる「所長」。

普通の女の子なら、何らかの形で負の影響を受けているはずだ。

嗣月は、そんな私の思いを見透かしたように、さらりと付け加えた。

「あたしは、あの人たちの生き方を肯定しているけど。娘なんかの為に彼らが仕事を放り投げたら、その方があたしにとっては嫌だからな。潔い人たちだと思う」

そして、この一風変わった事務所にも慣れてきた、八月の下旬。

私の人生を根底から変えた、あの事件が起こった。

私がこれから書き残すこの物語は、私の大切な人の墓標であり、美鷺嗣月という人間が、この時代のこの地上に存在していたという事実の記録である。

## 序章（後書き）

暑く湿った日本の夏を背景に、冷たく淡泊な女性が事件を紐解いていく、そんなコントラストを描きたくて書き始めました。執筆ペー  
スは遅いですが、最後までお付き合い頂ければ幸いです。

## 第1章 幽明と遺愛

### 第1章 幽明と遺愛

境内に溢れる蝉の鳴き声のシャワーの中、葬儀は滞りなく進行していた。

眠気を誘う単調な読経と相俟って不快指数はかなりの高さに達しているが、安曇緋奈は一時たりとも正座を崩すことなく遺影に視線を送り続けていた。

年の頃は二十代後半、栗色の髪をアップに纏め、今は青黒く隈の浮いた薄化粧ながら華やかな顔を、斜め上に僅かに傾けて座っている。

シャープに鍛えられた長身を黒の細いワンピースに包み、ふつくらとした唇を前歯で噛み締めている彼女は、業界で最近注目を浴び始めた劇団「DAY DREAM」の主役級舞台女優である。

本名の代わりに記帳した「雛宮明日見」は、十年以上も慣れ親しんだ芸名だ。

遺影の男性、葵慎太郎は、三十五歳という若さで世を去った医師であった。

彼女と、六歳年上の棺の中の男とが昨年から恋愛関係にあったことは、慎太郎自身が嬉しそうにその事実を友人たちに話して回ったこともあり、参列者の皆知るところだった。

のみならず、彼の死の遠因が他ならぬ彼女にあるということもまた、その場の全員が解っていた。

女優としての緋奈には、十八歳で芸歴をスタートさせてからそれなりの数の固定ファンがついていたが、最近になって常軌を逸した行動に出る男が現れた。

その男、水無瀬雅人は、劇団の稽古場を覗きに來たり、緋奈の出

演ずる舞台を密かにビデオにおさめるだけでなく、稽古から帰る彼女の後をつけたり盗撮したり、どこかで手に入れたのであるう緋奈の携帯の番号に再三電話をかけたなりなど、ファンとして許される領域を超えた振舞に及んでいた。

緋奈は警察への連絡を真剣に考え始めていたが、夏の公演が終わるまではと先延ばしにしていた。

そして、東京の気温が八月としては過去最高を記録した八月十七日、惨劇は起こった。

渋谷の劇場での公演を観に来ていた慎太郎が、終幕後に緋奈のいる楽屋に花束を届けに来たのが、午後八時を少し回った頃だった。

緋奈たちと別れ、一般の客の波に遅れて慎太郎が劇場を後にしたのが九時ちょうどで、本来なら彼は車ですぐの三軒茶屋のマンションへと帰宅するはずだった。

しかし彼は翌日の朝、胸から包丁を生やした遺体となつて、池袋に程近い安アパートの一室で発見された。

その日の明け方、たまたまゴミ出しに部屋を出た隣人が、その部屋のドアを開けっ放しで逃げて行った男の姿を目撃し、それが何度か挨拶を交わした隣の部屋の主であると知っていたために、警察はその男、水無瀬雅人を直ちに重要参考人扱いで捜し始めた。

そして、被害者と交際していた女性に水無瀬がストーカー行為を繰り返していた事実が明らかになるまでには、半日もかからなかった。

ストーカー対象の恋人への歪んだ嫉妬が殺意へと変貌したのは、誰の目にも明らかだった。

事件から一週間後、ようやく慎太郎の遺体は司法解剖から戻ってきた。

死亡推定時刻は十七日の深夜から十八日の未明にかけて、致命傷はやはり心臓部への包丁の一突きで、ほぼ即死ということだった。

凶器の出刃包丁の柄には、水無瀬雅人の右手の指紋がべったりと

残っていた。

全国に指名手配された水無瀬雅人は、依然として捕まっていない。少ない親戚を早くに亡くしていた慎太郎の葬儀は、同僚や友人が共同で執り行うことになった。

「・・・明日見さん、大丈夫なんすかね？」

最後列に正座を崩して座っている、好青年然とした絹のような黒髪の男が、無精髭で大柄な中年の男性に問い掛ける。

「気丈な子だよな・・・あの日からろくに食べても眠ってもないつてのに、泣きもせずあややってしつかりしてて。女優だから多少はコントロールもできるんだろうが・・・」

若い男は夏樹貴矢、もう片方は時任真。共にDAY DREAMの主力俳優である。

慎太郎とは、何度か楽屋の入り口で顔を合わせた程度の面識しかない二人だったが、友人の緋奈を気遣って、半ば無理やりに葬儀に同席していたのだった。

「気丈」。

真の表現は、半ば正しく半ば間違っていた。

彼女を崩れさせずにいたのは、悲しみと向き合おうとする意志ではなく、悲しみを上回り噴き出す強い憎しみだった。

黒枠の写真の中の恋人を真っ直ぐにみつめた、彼女の瞳に灯る炎の正体を、まだこの時は誰も知らずにいた。

慎太郎が殺害された五日後、つまり葬儀の二日前、緋奈の携帯にかかってきた一本の電話が、総ての始まりだった。

“ストーリーカー猟奇殺人・美人女優を巡る男たちの確執！”などとワイドショーが騒ぎ立てている最中なので、マスコミからの無神経な電話取材や悪戯電話を防ぐ為に、固定電話はジャックを抜いたままにしてあった。

発信元は非通知と表示されているが、携帯にかかってくるのは少なくとも自分の交際範囲内の人間の電話だろう。

逃亡中の水無瀬が自分に連絡を取ろうとするとは思えなかったし、  
そもそもそう考えるだけで吐き気が襲ってきそうだった。

「はい・・・」

「安曇緋奈さんですね？」

聞き覚えのない男の声だった。

「水無瀬雅人の居場所を知りたくはないですか？」

その穏やかで優しい口調に、ぞくり、と緋奈の背筋に悪寒が走った。

「・・・悪戯はやめて。あいつなら警察が捜して・・・」

「日本の警察はアテになりませんよ。僕は水無瀬が現在どこにいるかを貴女に教えることができます。もし貴女が、それを望むのなら」

緋奈の言葉が終わらない内に、男は畳み掛けるように続けた。

「・・・どこにいるっていうのよ、じゃあ」

「僕の目の前です」

緋奈の顔から血の気が引いた。

「なん・・・ですって・・・？」

「あ、僕、こう見えてもちよつとした探偵業みたいなことを本職に  
してましてね。『こう見えても』って、まあ顔は見えないですけど・  
・怪しい者じゃないですよ。貴女の恋人の葵さんが殺害された事  
件、僕なりに興味を持って勝手に調査してたら、なんと水無瀬くん  
の身柄をゲットしてしまいました」

朗らかに言つて、くすくすと男は笑う。

「さすが僕！つてことで、とりあえず当て身をくらわせて縛り上げ  
て、貴女の携帯の番号を聞き出したってわけです。ほら、何か喋っ  
て下さいよ、水無瀬さん」

数秒の沈黙の後、ごそごと衣擦れの音が聞こえた。

「殺したのは俺じゃない！！信じてくれ！！」

その声は、以前に何度も電話で聞かされた水無瀬のものに間違い  
なかった。

太り気味の身体に乗った丸い顔と、粘着質な光を帯びた瞳を思い出し、緋奈は息を詰ませた。

「あーはいはい、大きな声を出さないように。安曇さん、僕の言う事を信じて頂けましたか？」

前半は水無瀬に、後半は緋奈に向けられた言葉だった。

「本当に・・・あいつが、そこに？」

「ええ。こんな嘘を言うことで、僕に何かメリットがありますか？」男の理性的な話し方は、人に信頼感を抱かせる力を持っているように思えた。

「では・・・単刀直入に言いますね。水無瀬雅人の身柄を、購入したくないですか？」

「身柄を・・・購入？」

「買った後で警察に突き出すのもよし、あるいはご自身で恋人の仇をとるもよし、お好きになさればよろしいということです。もし買って頂けないのなら、少しでも逃走資金を与えてもう一度野に放ちますよ。そうになったら、見付けるのは難しいように思います」

これは、「誘拐」なの？

混乱した緋奈に、男は話し続ける。

「値段はジャスト五百万円です。お互いに後ろ暗いことをするわけですから、僕から秘密が漏れることは絶対にありません。取引の際には僕も素顔をさらしますし、殺害に及ばれた場合には僕も教唆犯になりますから一蓮托生です。双方が沈黙を守ることで、復讐は完璧なものになります」

「そんな、突然言われても・・・」

「勿論、猶予期間は差し上げますよ。こちらも色々と準備がありますしね」

耳に伝わる息遣いから、男が薄く笑ったのが想像できた。

「三日以内に、ご自宅のマンションのベランダに、ピンクと水色の布を並べて干して下さい。シーツでもタオルでも、外から見えれば何でも構いません。それが、取引に応じるという合図です。商談に

応じて頂けないなら、僕のことはさっぱりと忘れて下さい」

男の口調はいかにも明晰そうな響きを帯びていて、緋奈にはそれが余計に不気味だった。

「いいですね、三日以内ですよ。詳細をお話できるのを、楽しみにお待ちしています」

緋奈の返事を待たずに、電話はぷつりと切られた。

濃紺の闇に侵食されるリビングで、姉妹は無言で向かい合って座っていた。

緋奈は、仕事から帰った朱音に先程の電話の内容を総て話し、両親の遺産を使わせて欲しいと頼んだのだった。

「私、慎太郎を殺したあいつが、たかが数年の懲役で許されて出てくるなんて納得できない……。慎太郎がそんなこと望んでないのは解ってるけど、それでも、あいつを……。水無瀬を、この手で殺してやりたい……」

途切れ途切れの姉の言葉に、朱音は泣きそうな顔で反駁した。

「お姉ちゃん、そんなことしたら、お姉ちゃんまで人殺しになっちゃうよ。その男が本当にあいつを捕まえたなら、警察に引き渡してちゃんと罪を償わせるべきだと私は思う。そうでなきゃ、お金は使わせられない」

数十秒の沈黙の後、緋奈は静かに頷いた。

「解った。それでもいい。でもとにかく、あいつを逃がさせはしたくないの」

それを聞いて、朱音は安堵したように小さく溜息を吐いた。

「身代金、か。私たち、そんな危険そうな男と取引なんて、できるのかな……」

「このマンションのローンの分を引いた遺産の残りを全額使ったとして……。それでも五十万くらいは足りないと思う。どこから借りてこないといけないけど、サラ金とかは嫌だし、劇団の人からも無理だし……」



朱音は暫く思案した後、ゆつくりと言葉を紡ぐ。

「・・・頼んでみられそうな人なら、心当たりがある。すぐく頭のいい人だし、冷静だし、秘密も守ってくれそう。だってその人は、」  
朱音の脳裏に浮かんでいる女性は、何の動揺もせず話を聞いてくれそうな唯一の人間だった。

「法律事務所の、『所長』なんだから」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0243a/>

---

Summertime Blues

2010年12月11日14時15分発行